

## 第5回 大分県庁支部 直野智和（大47）（2020.5.14）

私が入学したのは1994（平成6）年だった。ついこの間のことと錯覚するが、もう四半世紀も前になる。

大学という環境は、高校とは全く違っていた。授業を自分で選んで、自分で時間割を作る。授業のたびに教室を移動すること。テレビでしか見たことがなかった階段教室での授業があることなど。入学当初は、日々の出来事のほぼ全てが初めて経験することだった。

入学すると音楽のサークルに入ったが、お金がかかるので1年間で辞めて、2年生になるとアルバイトを始めた。市内にあるパン屋で、朝6時から午後2時くらいまで、パンを捏ねたり焼いたりした。4年生の半ばまで続けた。


3年生になると片山准一先生のゼミに入り、コーポレートガバナンスを学んだ。当時、片山先生は論文作成の指導に力を入れていて、私たちにも、共同で論文を作成して学部内の懸賞論文に応募せよという指示が出た。テーマは、持株会社解禁の是非について、結論は、解禁は時期尚早、となった。ゼミ生全員で論文の構成、章立てを考え、分担して執筆した。夏休みには湯布院で合宿を行い、中間報告会を行った。もちろん夜は皆お待ちかねの飲み会だった。

当時はWindows95が発売された翌年で、この頃、私も中央町のベスト電器でパソコンを買った。当時、パソコンはまだ高級品で、私が買った機種はエントリーモデルだったが25万円もした。アルバイトで貯めたお金が全部消えた。もちろんUSBメモリなどない時代で、データの持ち運びは専らフロッピーディスクだった。

また当然、個人がインターネットを使用できる時代ではなく、参考資料は紙の書籍・雑誌しかなかった。大学の図書館には随分とお世話になった。図書館にない本はフォーラスのジュンク堂書店やパルコのブックセンターで買った。

こうして予定通り論文を作成し、懸賞論文に応募した。結果は、私たちの論文が一等だった。賞状のほか副賞として賞金10万円をいただいた。少し贅沢な慰労会を行い、残りはゼミ生で山分けした。論文作成は随分と四苦八苦したが、一つのものを共同で作るというのに対して、大きな充実感を味わった。また、おかげで論文作成のノウハウが身につく、卒業論文を書く際にはとても役立った（私は、卒業論文を再構成・加筆してもう一本論文を作成し、豪胆にも一人で再び懸賞論文に応募した。そして今度は一人で一等をいただいた）。

振り返ると、凡庸ではあるが自分らしい大学生活であった。今度実家に立ち寄ったら、当時のアルバムを開いてみようと思う。



大分大学経済学部には、青春の一部を過ごさせていただいたことに感謝いたします。また、地元経済発展への貢献を引き続き期待するとともに、次の100周年に向けて益々の御発展をお祈り申し上げます。